

掲示板のことば

生のみが
我等に
あらず
死もまた
我等なり

清沢満之

2021. 03

この言葉は、明治の真宗の僧侶、清沢満之の言葉です。清沢師は、東京大学哲学科を首席で卒業され、真宗大学（現在の大谷大学）の初代学監（学長）を務められました。哲学者・思想家という面も持ち、浄土真宗の近代教学の祖とされています。仏教を近代の哲学の言葉などで表現し、思想的に広めた先達です。

清沢師は若くして結核にかかり、41歳で亡くなります。結核にかかってからは、常に死と向き合い、阿弥陀如来による救済を信じていかれた方でした。

この言葉には、「我等は生死を並有するものなり」という言葉が続きます。

仏教は、お釈迦様が「老・病・死」という苦からの解放の道を探られたことから始まってきたとすることができます。その道は、苦しみを取り除くことではなく、苦しみを抱えて生きていく道だと私は受け止めています。

つまり、老いるも私、病むも私、死するも私であると。生まれたからには、必ず、老・病・死と共に生きていくのだということではないでしょうか。それが、清沢師の言う「生死を並有する」ということなのでしょう。

「生のみが我等」とであると言ったとき、「死」は否定したいこと、または敗北ということになってしまいましたが、「死もまた我等」と言えるときには、決して「死」は敗北ではなく、「生」の意味を充実させる大切な縁であると受け止めることができるのだと思います。

仏教の死生観を、清沢満之はこのように表現されているのです。

真宗大谷派 光明寺住職 小林尚樹